



俺 0 0 0 1 4



book-fukunokami

パンダみたいな犬

「オレもパンダみたいな犬を見るんだ」

パンダの前で俺は叫んだ。

「なんだよお、パンダ見てるし、パンダみたいな犬じゃなくてパンデ満足してよ」

パンダを見ていた小学生が叫んだ。

「なんだと、パンダの前でパンダみたいな犬がみたいだとお」

他の男が叫んだ。

「ひどいわ、ひどいわ、パンダさんかわいそだわ」

他の美人の女の人が叫んだ。

ちょうどそこにパンダみたいな犬をひきつれた人が現れた、性別も年齢もわからない、だが小学生じゃなさそうだ。

「おお、なんという偶然、これはパンダみたいな犬だ」

「そうです、パンダみたいな犬だからパンダを見せようと」

「そういう事だったのですか、パンダも喜ぶでしょう」

だがパンダは怒っていた。

「おお、パンダ怒るな、怒るな」

やがてパンダみたいな犬もパンダに吠え出した。

わんわん、うーわんわんわんわん。

パンダは笹を持ってパンダみたいな犬を攻撃してきた。

きゃいん、きゃいん。

パンダみたいな犬は逃げようとしたが飼い主につながれているので逃げられない。

笹がパンダみたいな犬にあたった。

パンダみたいな犬は笹を食おうとした。

これにはたまらず飼い主がパンダとパンダみたいな犬を引き離した。

「残念、無念ですね」

「そうです、残念、無念です」

そして日が暮れた。